

イケてる PEOPLE

イメージを
いろいろな形で表現したい
ビジュアル系詩人

かすみ
嘉住友子さん
(八鹿町)



DANCE IN DAYS

よせる波は 日常の混沌
刻一刻と 色をかえる

ぼくは そこにのみこまれ まきこまれ

うかんだり、
しずんだり、

きまぐれに おどる

そして、

きみの横顔にみとれたり
Tシャツのふくらみにドキドキしたり

波のなかで
きみを抱き

「うっしょ」 おどろん」

水平線がみつめている

とおく とおくから…

ゆるやかに弧をえがき

ぼくらを影ごと つつみこむ

自分の思いや感じたことを文字で表現してみたい。嘉住友子さんが詩を書き始めたのは高校の頃から。ノートのほしに書き込んでいたといいます。もともと嘉住さんは鳥取県倉吉市の生まれ、6年前に八鹿町へ引っ越してきました。その頃から、詩のコンテストに応募するようになったとか。

そして、1997年、キャスターポエムコンテストに入選、1998年には国民文化祭「かがわ」現代詩部門に入選し、自分の作品が認められるようになってきました。

「あちこちに出かけていたり、人に会ったり、いろいろなことを体験して感じたことが文字になるんです。自然と言葉があふれ出て、言葉が天から降りてくる感じでしょうか。だから、テーマとか決められると書きにくくて…」とは言え、北近畿情報誌の1つのコーナーを受け持ち、2年間連載したこともあります。

1998年、和田山町「アトリエ白」で初めての個展を開きました。紙の上だけで終わらないで、詩のイメージをいろいろな形で表現したいと、あれこれとアイデアを出しながら試行錯誤の中で作品をつくりあげました。イメージした色や抽象画っぽいものと詩を組み合わせ、ビジュアル的に感じてもらいたいと新しい試みに挑戦しました。

自分のつくった詩を多くの人に見てもらえ、とてもうれしかったそうです。

「詩って写真のように、その瞬間その瞬間をとらえて表現するんですが、それらを集めて全体として、ひとつの物語をつくりあげたいと思っているんです。組み詩っていうんでしょうかね…」と夢を語る嘉住さん。

但馬に来て、児童養護施設の指導員として働きながら、たくさんの人々とめぐり会い、自然の中での生活にも慣れてきました。

「今年の冬、たくさん雪が降りましたよね。人間は雪が降って大変だと右往左往してるんですけど、ハッと気づいて空を見上げると、月がいつものところできっと見てたりして…。月はわちゃわちゃ人間が動くのを黙って見てるんだな…と思うと、人間は宇宙の中のひとつの物質なんだ…と思うんです。但馬に来て、季節の移り変わりがはつきりするようになって、切実に感じるようになってきました」

将来はプロとして、詩で食べて行けたらいいなど、地道な創作活動に励んでいます。言葉のひとつひとつに新鮮なキラメキがちりばめられ、嘉住さんの心の文字として生き生きと踊り始めます。但馬の暮らしの中で、嘉住さんの感性がもつともっと花咲いて、すばらしい詩が生まれていくのでしょうかね。

毎日の暮らしを彩る
「たんぎんマイライフ通帳」
「たんぎんバンクカード」はいかがですか？

たんぎんバンクカードは
デビットカードとしてもご利用いただけます。

地域社会の発展に奉仕する
但馬銀行
本店 豊岡市千代田町1番5号
たんぎんホームページアドレス
<http://www.tajimabank.co.jp/>



① 赤い座布団、碁盤の目のはっぱは「若衆」黄色の座布団、黄色のはち巻は「助」
② 黒ずくめの衣裳に竹を持っている「警護」
③ 白いはち巻赤い袴は祭を仕切る「執頭」

年齢	役職名	服装・役割・特徴
15~	小若衆	● 正規の服装は、縹子のパツ子、団七とよん、たび黄色の布、黒いはち巻
18~23	平若衆	● 若衆の上で、大切な地位
24~25	若頭(衆)	
	↓	
27~28	執頭 頭ら 執し又 総代頭	● 団七はつけるが座布団はつけない。豆絞りはち巻、赤い袴とリボンをつける。 ● 祭り行事を進行する責任者。直接だんじりを担いだり押ししたりしない。 ● 執頭の中心役。
	↓	
30	後見	● 団七はつけず、威厳を示す。
	↓	
34~45	若助 助頭	● 団七はつけず、座布団は角を用い一般の円形と区別する。 ● 祭りの行事の大切なところで力を貸してだんじりが、うまく動く様若衆を助ける。
	↓	
45~50	若警護 警護	● だんじりの周囲にいて、進む道に危険はないか、轢り合いの隙、紛争のものにならないか、いつも注意し事故のない様誘導警護する。 ● 服装は上部、下部の紋のついた黒の筒袖を着、袴は白いはち巻帽子をかぶり長さ120cmくらいの竹の袴を持ち指示する。
	↓	
50~52	警護頭	● 警護頭は竹の袴先に白布をつける。
	↓	
60~	大警護	● 上部にはないが「太鼓」がそれに当たる。 ● 下部は和服に羽織を着用し扇子を持ってだんじりの上に乗り細い指示を与える。 ● 太鼓方と共に経験と識見ある人物とされる。

まじり 伝説

祭りの為だけの階級があり、それによって役割が決められる。独特の服装に身を包み、「だんじり祭」がはじまる。威勢の良い太鼓が響き、一の湯前の三つ巴のせり合いは迫力満点。熱い血がたぎる祭りの醍醐味だ。

10月14・15日、城崎温泉でおこなわれる「だんじり祭」は古くから続く四所神社の祭だ。この日は城崎にとつて特別な日。学校も会社も休み、都会に出てくる人たちも帰って来て祭に参加する。ここでは古くからのしきたりや守られている。城崎温泉街は上部・中部・下部に分かれ、だんじり経験の年功による階級的な役割が決められる。職名や服装も独特なものだ。特にこのだんじり組織の階級は家柄、社会的地位、学歴などに関係なく、純粹にだんじりを動かす組織人としても強い絆となっていて、社会的習慣や上下関係のしつけ、知識を身につけ、人間的成長を遂げる機会を与えているという。

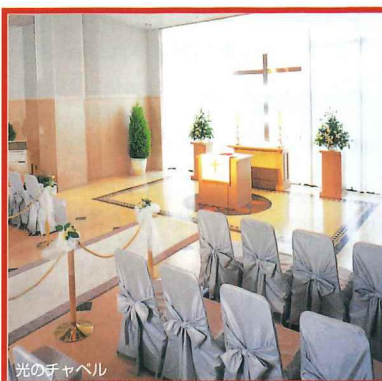
祭りまでには、いろいろな準備がある。だんじりの金真を磨いたり、掃除して美しくしたり、車のあちこちを調べて故障なく動くように念入りに点検する。また、大だんじりの屋根につけるまっ白な御幣は、毎年新しい紙でつくりかえるが、この作業を「御幣さばき」という。上部の小だんじりの御幣は2年ごとに御幣さばきをする。それから、警固の人たちにあいさつして、衣裳を配って歩く。また、上部の神輿台は、縦棒をはずしているので、祭りの前日に「棒がらみ」といって、縦棒を台にしっかりと麻縄でくくりつける作業をする。なかなか技術のいるものらしい。他にも、電線上げや柳の枝切りなどをして、だんじりの屋根の御幣がつかえないように細かな注意をし、「せり」の場合に車がスリッパしないための歯止め木をつくったり、夕方に使う笹竹や提灯も数多く準備される。これらの準備は、すべて執頭が中心となって若衆がおこな



クライマックスを迎えた一の湯前のせり合い。龍の幕があざやかなだんじりと奥の台が一步も譲らず、白熱した祭りの瞬間。

い、祭りのいろいろなしきたりを覚える。祭りの当日、だんじりと神輿の動く道筋は決められている。神輿を守る上部の台と、中部・下部の大だんじりとの競り合いが始まる。最後には神輿が下部に入り、神輿を守って帰ろうとする台を大だんじりが邪魔して帰らずまいとし、神輿がそこではじめて、上部の台に加勢して争いに加わるのだ。そして、クライマックスともいうべき、一の湯前の三つ巴の争いが始まる。この際、大だんじりはいかなる場合にも、神輿に突っかけることが許されない。見物の人たちは互いに隙をねらう対策を楽しみながら、だんじりの動きを見守るのだ。最後は神輿が四所神社に無事に戻り、祭りは終わる。

独特なしきたりの中で守られているだんじり祭。この日のために城崎の人々は燃え尽きる。

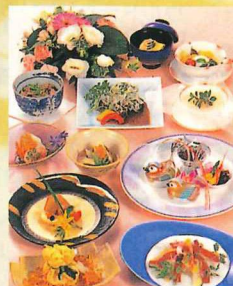


光のチャペル

時を奏でるウエディング

光のチャペル完成記念 シンフォニープラン

大切な人と、大切な時間を。
木漏れ日が揺れ、光あふれるヴァージンロードを、一番大切な人と歩きたい。
あなたにとって大切なこの日を、大好きな音楽と花で演出。
かけがえのない時間と想い出が、きっとここで見つかります。



50名様(税金別)
¥980,000
お一人様追加ごとに
¥15,000(税金別)

ご予約
承り中

時を奏でるホテル

〒668-0263 兵庫県出石郡出石町福住450番地
TEL0796-53-1111 FAX0796-52-6111